

「大工」

—「大工」が伝えてきた日本のものづくり精神と技能—

株式会社梅田工務店 代表取締役 梅田 宗春

耳を疑った。

「大工」って名前がすばらしすぎる、とある人に言われたのだ。

私は大工という名前があまり好きではなかった。ださく、古く、イメージが悪いと思っていた。

改めて考えてみた。世の中に職業は多々あれど、「大」が頭につく職業名はない。いや、あった。大統領、大臣。友人の大学教授が「私も」と手をあげた。却下。それは大学の「教員」だ。では、なぜ大工は「大」がつくのか。

歴史的に検証すれば、聖徳太子が右官、左官と任命し、右官が大工だという説もある。古い絵巻物に描かれる大工の頭をよく見てみれば、それらの大工棟梁は墨壺・差し金・墨差しをもって作業をしている。そう、墨付けをしている姿が描かれているのだ。

「墨付け」とは木材の質を熟知し、床や屋根の荷重・応力を見極め、まさに適材適所に分配し木構空間を構築する、木材や寸法・仕口を完全に把握し、すべての下職の仕事の納まりを熟知し、思想・理念・

概念を明確に認識して建物全体を束ね納めるために打つ墨の印のことだ。この墨付けが大工仕事の要であることが「大」という称号を与えられたゆえんであろうか。

「墨付け」をわかりやすく説明する。まず、材料を選ぶ。その木の天地、木表、木裏、株末、目積、抜節を見極め、そこに墨で印をつける。図面に書かれた寸法どおりに木材に転写するのなら簡単だが、そうではない。図面には書ききれない部分を読み取り、看板板に平面図を書き、まず、間竿という定規を作る。次に高さのための柱つえという定規を作



柱の選別



地松化粧太鼓丸太梁の加工



地松梁の仕口・組手

る。この2本の定規をもとに立体を組み上げ、数百本の部材に墨でマーキングする。1本について数十の寸法を入れるのだ。こうして入れる寸法は、延べ数千～数万にもなる。1つでも間違えれば家は建たない。

しかし、寸法の計算や記憶する寸法の多さといったハード面の困難はたやすい。ここで自分の心との戦いが起こるのである。人間の思考には思い違い・勘違いがつきものである。「これでいいのか」「間違っていないか」何度確認しても、消せない疑心暗鬼。己とのこの戦いに勝つ強い精神力をも持ち、乗り越える者のみを大工棟梁と呼ぶ。

さて、高さや長さをマーキングしたら建物が建つか？ ここで重要な仕事がある。接合部である。

いかに丈夫な材料を用いても、接合部で応力をうまく伝えられなければ、強い構造体ではない。鉄筋コンクリートRC造であれば液体を流し込んで固体化させるので接合部は発生しない。鉄骨造はすべて溶接とボルトによる接続で一体化する。しかし、木構造においては、接続箇所があり、そこには必ず欠損がでる。しかし、そこは、組みあがれば見えない。しかし、その欠陥をも頭に入れた木組みをしていく知識が必要になる。しかし、近年、金物でジョイントするという工法が増加してきた。非常に簡単にできる工法である。それが主流となったのは、大工が伝えてきた仕口組手を墨付け、加工できる職人が激減したからである。それとともに、数値で表しきれない堅牢さを解析できないためである。

日本の木造の技能は、厳しい徒弟制度のもと、千年を超えて伝えられ、問題のあるものは淘汰され、



化粧天秤梁の納まり

優れたものは改良され継承されてきた。その伝統的寸法を熟知した大工が、後世に残る堅牢な木造を建ててきた。その優れた技能をここで断つてはいけない。大工を学ぶ者が受け継ぎ、スクリーニングし、次に伝えていくべきでは、と考える。

このように、3次元の空間を構築し、厳しい自然環境から人を守る空間を造ることが、1つの基本ベースである。しかし、更にここに思想が入ることで文化性の高い空間となる。いつの時代も、建物は文化・芸術と融合し、その時代を反映した建造物を造ってきた。



地松太鼓丸太梁の組手



長ホゾ・連柱による耐震ねばり工法



上棟風景

一例をあげれば、利休の茶室「待庵」。屋根は木の皮、入口は古雨戸のきり抜き、柱は足場丸太、床柱は節付、壁は藁スサだらけの荒壁、どれもこれもそこらに転がっているような雑材ばかりだ。しかし、つくられた空間は見事に美しく、厳粛な空間を醸し国宝とまで昇華する。思想・理念・概念が明確にはりつめている。それがハードで作られたものづくりの先に追い求め、大工が最後に生涯をかけて探究する領域である。

このように、大工道は難しく厳しい。職人という道は、単純な仕事ではないため、修得するまでに数年かかる。その間、親方は、その人材に対してある意味、投資することになる。一人前の大工となり、貢献してくれることを期待しているのだ。しかし、現実には、目先しか見ず、少しできるようになれば一人前と錯覚し、本質や真髄を学ぶことなく親方から離れてしまう。続ければ、本物の大工棟梁となり、親方の地盤を引き継ぐことができるのだが！

しかし安易に大工に興味を持つ者が多いのが現状だ。世間一般では鋸や金槌を使い、木を切り釘を打つのが大工の主な仕事と考えられている。小学生の

男の子のなりたい職業ランキングにもそのイメージで常に上位に入り、トントン、カンカンと「お母さんに家を建ててあげたい」とかわいい動機があげられる。

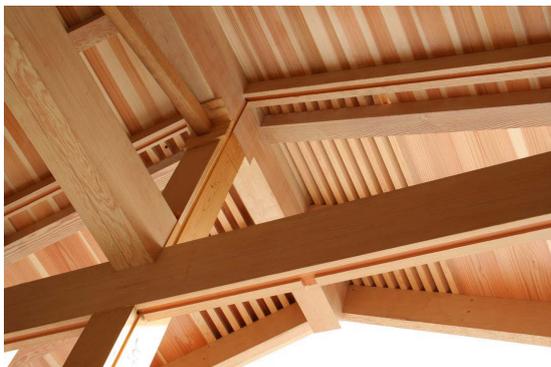
「大工になりたい」と私の門をたたく若者に聞いてみた。彼らのほとんどは、一流企業に勤め、ある程度の地位の父親を持つサラリーマン家庭に育っている。自分もそれなりの学校を出て、いざ就職に当たり考えてみたが、親父のような人生を送りたくない、という。早朝からラッシュにもまれ、どれだけがんばって働いて地位を築いても、定年退職すれば何も形に残らない、親父の後ろ姿を見ているのである。人生を生き証が欲しい。自分の手で一軒一軒、家を建てて、己の人生の歴史を刻みたい、と！しかし、そこには能力主義という厳しい道が待ち受けていることを心してほしい。

最後に、「家」を建てるということは、人生をかけた買い物といわれる。また、家の支払いのローンのために必死で働き続けるのがほとんどであろう。家族の安らぎの場・安全・快適さを求める建主の思いを真摯に受け止め、具現化する建物は、働いた時間以上の耐用年数を持たなければならない。メーカーのカatalogからチョイスした新建材を並べ、使い捨ての短寿命の材料で建物を作るのではなく、大工が本来の形に戻って、長寿命の天然素材を軸に多用した家を作るべきではないか。

今は、世界中どこの都市に行っても同じ町並みである。コンクリートと鉄とガラスで出来上がった特徴のない都市が増加している。日本人も、唐の文化も、南蛮文化も、明治の西洋文明もいいものはすべて拒絶反応なく取り入れ、近代化のために融合させてきた。しかし、そのために多くの大事なものを捨ててきた。グローバル化した現在は、より一層、世界中から情報や工法、デザインが流れ込んでくる。しかし、あえてグローバル化した現在こそ多くの情報に惑わされずに、日本人が培ってきた技能・技術を原点に戻し、日本独自の考えで建物を生み出して、多様性を推し進めるべきである。私はそれを、古きをたずねて新しきを創る——「温故創新」と呼ぶ。



地松化粧梁と杉源平桎板天井



空気の熱膨張利用による自然対流排気穴